

東西テニスクラブ事情

クラブビジネス・コンサルタント 飯田 浩一

1. ロスアンゼルスの特ニスクラブ事情

ちょうど10年前の1992年、南カリフォルニア・テニスクラブマネジメント協会（TCMA）会長のスペンサー・ギャレット氏は、第4回テニス産業セミナーのゲストスピーカーとして、日本で講演を行いました。

その時の講演では、ロスアンゼルスの特21箇所のテニスクラブの運営形態について、スライドを使って紹介いただきました。それぞれのクラブがテニスブームの中で独自性を求めて、様々な施設やサービスを取り入れていたことが当時の資料からわかります。

ギャレット氏に10年後の現在、南カリフォルニアの特テニスの中心地、ロスアンゼルスおよびその近郊の特テニスクラブ事情はいかなるものか尋ねてみました。

「当時から兆候が出ていたことですが、純粋なテニスクラブというのは非常に少なくなり、代わってフィットネス等との複合施設への転換が目立ちます。10年前には“顧客サービス向上”という意味合いが強かったフィットネスの併設は、現在は経営上の利益拡大のために、積極的に導入されています。ロスアンゼルスでも土地コストの上昇は著しく、採算の困難なテニスクラブ事業から撤退する加盟クラブが相次ぎ、TCMAも活動休止状態の時期がありました。

しかし、高収益事業との複合化を図り、結果的にテニス事業を立て直したクラブが次々出現したことにより、テニスは再び人気を取り戻して現在は活況を呈しています。」

ちなみにギャレット氏の特テニスクラブは、3年前から宿泊施設を併設しているそうです。

2. デンバーの特テニスクラブに見る

コート運用システム

アメリカの多くのテニスクラブでは、たとえ会員制であっても“時間予約”によるプレーが主流となっています。

コロラド州の「デンバー・テニスクラブ」では、会員になるために入会金1,100ドル（約135,000円）を払い、あとは年会費415ドル（約50,000円）を納めれば一切追加料金はかかりません。

ただし、実際にプレーをするには、事前に電話予約することが条件になります。電話予約は24時間受付られ、音声自動応答システムで自分の希望時間帯をブロックします。機械操作が苦手な人は、ダイヤルの1番を押すとスタッフが応対してくれますが、これは昼間の時間帯だけなので、結局機械で予約する人が優先されます。

また、予約は1日1回90分まで、と制限があります。こうしたかなり厳格な予約システムに対して、「面倒だ」という会員がいることはほぼ同じ。

そこで予約対象外のコートも数面用意されていますが、こちらは完全な“先着順”。しかも一旦順番待ちの列に加わったら、「ちょっとそこまでコーヒーを」という離脱も認められない、これまた大変厳しいルールになっています。

しかし、予約や待ち時間に関する苦情はほとんど無く、会員には定着したシステムと言えます。

このクラブは、市の中心地から車で15分という非常に便利なロケーションにあり、12面のコートで会員数は700人以上だそうです。都市型クラブの1つの生き残り策と言えるでしょう。

3. シカゴの特テニスクラブの

ユニークな会員サービス

アメリカ最大のテニスクラブ運営会社（いわゆる経営アウトソース受託会社）であるTCA社は、シカゴを中心に40箇所のテニスクラブを運営しています。シカゴと言えば冬の寒さとミシガン湖から吹き付ける強風で有名で「ウィンディーシティ」との別名があります。この気象条件はテニスクラブには相当厄介で、事業者の頭の捻り所となります。

TCAの場合、全てのコートはインドアで、1年中快適なプレーをうたっていますが、全米第3の都市ですから需要も相当なものです。当然時間予約制や早期会員などコートの稼働率向上の施策は導入していますが、さらに目玉となっているのが「パドルテニス」。これはテニスコートを約1/3の大きさに縮小して、穴あきボールと卓球ラケットのようなパドルで打ち合うと言うもの。ショートテニスに似ていますが、ボールの速さや打ち返す力などはフルサイズのテニスにより近く、結果的に十分な運動量が得られます。

事業者にとっては1/3のスペースにメンバーを入れることで、キャパシティを向上させることが出来ます。「テニスは1回に4人しかプレーできないから」というのは事業者の共通の悩みですが、気象条件をその解決に利用してしまうあたりは、感心させられます。なおTCAはクラブ内にスターバックス・コーヒーの小型カウンターを設置していますが、これは世界でも初の導入例で会員からの評判も上々とか。

4. 上海テニスクラブ事情

経済開放が著しく進む中国では、沿海地方を中心に富裕層が出現を始めています。

ゴルフ、自家用車、ナイトクラブなど、これまでは外国人や一部の特権階級のレジャー市場であったものが、どんどん「ニューリッチ」族に広がっています。

テニスもまさにそういった「カッコいい」レジャーの代表です。「お金持ちは善」であり、「健康は何より大切」な中国人にとって、テニスの持つハイソサエティ・イメージと充実感のある運動量が受けているようです。

上海中心部にある「上海国際網球中心倶楽部(Shanghai International Tennis Center Club)」は、トップエグゼクティブのためのクラブを標榜するだけあって、年会費は30,000元（約450,000円）、コート利用料は1時間で250元（約3,750円）となっています。3時間もプレーすれば、広州あたりの工員の月給に相当する額になってしまう計算ですが、上海の富裕層が入会待ちの列をなしているそうです。

ちなみにこのクラブではコーチによるプライベートレッスンが受けられますが、その料金は1時間で150元（約2,250円）。一方、日本でも流行の足裏マッサージも提供されており、こちらの料金は30分で250元（約3,750円）です。「健康」に対する経済観念は、独特のものがあるようです。

以上駆け足で、アメリカ、中国の特テニスクラブ最新事情をご紹介しました。日本では一子相伝の色彩が濃いテニスクラブ事業ですが、潜在的プレーヤーをまだまだ取り込めるはず。クラブ事業に立ちだかる困難な条件も逆手に取り、上手に需要を掘り起こすこうした海外の事例には、いろいろなヒントがあるように思います。